

不 定 期 連 載

フレンティアが聞く!

第2回

みえのひとびと



今回は 40 代男性匿名希望の A さんです。匿名なのは、A さんがゲイだから。自分を名乗れない状況を含め、いろいろお話を聞かせていただきました。

—今年 4 月に発表された電通ダイバーシティラボの調査（約 7 万人を対象）では、LGBT(※)に該当する人は 7.6%でした。まず当事者としての実感を聞かせてください。

LGBT 合わせたら、少なくともそれくらいはいるかなと思います。ゲイだけで結構いますから。マイノリティといえば確かにそうですけど、多数派に比べれば少数派という感じかなあ。三番手、四番手の野党くらいの感覚です。決して希少ではない。都市部の方が生きやすいので、三重県を出ていく人もたくさんいますが、三重県に住み続けている人もたくさんいます。世間の人たちは身近にゲイがいらないと言いますが、人生の中で必ず何人か、もしかしたら何十人かのゲイと出会っているはずですよ。都会の話じゃなく、三重県です。ただゲイだと気づいていない。結婚している人もいますし。

普通のゲイって特別ではないので、あまり外から見てわからないでしょうね。ゲイは芸術的センスがあると言われるますが、世間で知られているゲイに多いただけじゃないかなあ。いい人もいればイヤな人もいる、おもしろい人もいるし、つまらない人もいるし、ゲイという以外、何ら世の中の男と変わらないと思います。

LGBT、性的マイノリティとひとくくりで言われますが、正直なところ、僕はゲイ以外の方がどれくらいいるかはわかりません。知っている LBT（レズビアン、バイセクシュアル、トランスジェンダー）の人もほとんどいない。だから、一般の人が身近に LGBT がいないと感じている感覚もわかります。でもゲイがこれだけいるんだから、LBT も同じくらいいるんだろうなと。

それにしても電通がそういった調査をしているのはおもしろいですね。確かに LGBT 市場だけでも小さくはない。でもそれ以上にゲイマーケットをまず押さえておくと、ゲイ以外に波及して、ヒットするということは結構あるような気がします。ゲイコミュニティの伝播のスピードはすごいです。mixi なんかも初期の段階で一気にゲイの間で広まりました。世間のほうが随分遅かったと思います。あと、ゲイの中で大流行したアメリカのブランドも、そのうち一般にも広まって、数年後には直営店が日本にできていました。僕の感覚なので因果関係は確かとは言えませんが、「ヒットを狙いたいならまずゲイの間で流行らせろ」というのは、結構言えるかもしれません。ゲイにピンポイントで宣伝するなら、費用対効果も抜群ですよ。

(※)LGBT・・・Lはレズビアン。自覚する性別が女性で、恋愛対象として好きになる相手も女性である人。Gはゲイ。自覚する性別が男性で、恋愛対象として好きになるのも男性である人。Bはバイセクシュアル。恋愛対象として好きになる相手が男性と女性の両方である人。Tはトランスジェンダーまたはトランスセクシュアル。生まれたときの「体の性別」と自覚する「心の性別」が一致しない人。

—取り巻く環境は変化してきていますか？生きやすい社会になってきていますか？

一番大きい環境の変化は、インターネットが普及したことだと思います。ゲイ同士が出会いやすくなり、地方に住んでいても日本中のゲイとつながることができるようになりました。完全に孤立している人の割合は減ってきているような気がします。誰かとはつながっている。

20数年前はゲイバーとか、ちょっとここで言うには憚られる場所でした。ゲイに会わなかった。時間と場所限定ですね。昼間偶然出くわすと、誰にも気づかれるわけがないのに、周りの視線を気にして、お互い変な雰囲気になったり、気づかないふりをしたり。それにバレルのが怖くて、ゲイ同士ですら本名を名乗らないことが多かった。

そういえば、友達がなぜか「忍者」って名乗ったら、絶対聞き間違いじゃなくてわざとなんですけど、「え、リンダ？豪華!!」って言われたことがあったなあ。なんかいつもそんな感じでした。お互い辛いことがあるのはわかっているけど、あえてそこには触れないで、中身の無いことをしゃべっては、笑ってた。でも、それって結局その場だけ楽しくて、深いつながりにはならないんですよね。だからやっぱり孤独。あの時代のあの感じ、今となってはすごく懐かしくて愛しいですが。

今は昼間でも遊んだりします。2人だと人目が気になって、行ける場所も制限されてきますが、3人以上だと結構どこでも行ける。深い話もするし、相変わらず中身の無い話も多いです。そんなことができるようになったのは、インターネットによってゲイ同士の距離が縮まって、お互い信頼してみようという気になったからなのかなと思います。

社会の理解も進んではきていると思います。今や公にLGBTをバッシングしたら、そちらのほうで神経疑われますもんね。ただ、僕らがゲイだと自然に言えて、生きられる社会には程遠い。難しいところですね。鶏が先か卵が先か。社会が受け入れる風潮になるのが先なのか、僕らみたいに普通の人間がゲイですって言って、「こんな普通の人だ」と理解をもらって、社会に浸透していくのか。

いまだにテレビに出てくるオネエタレントが、ゲイのステレオタイプだと思っている人がたくさんいます。それはそうですね、他のタイプのゲイを見たことがないんですから（実際は気づいていないだけで、見ているはずなんです）。ゲイの中には、「みんながあんな風だと思われる」「迷惑だ」とオネエタレントに否定的な人たちもいます。だけど、彼らのおかげで世の中にはこんな人もいるんだということが発信できた。その功績は大きいと思います。

話がそれますが、なぜあれだけオネエと呼ばれる人が出てきたのか。タレントだけでなく、特に僕らの世代以上の人の中には、オネエ言葉を駆使する人が結構います。でも女性でも使わない「女言葉」を使うのって自然じゃないですよ。あれって最初は、世間でいう「男らしさ」から少し外れた話し方とか振る舞いだったと思うんです。それを「オカマ」と笑われて。だったら笑われる前に笑わせてやれ！っていう精神で、どんどんディフォルメしていった結果、今のオネエという形態に進化していったんだと思うんです。ある意味、すごい反骨心ですよ。あくまで持論ですけど。

ちなみに友人の話ですが、大学時代、暇で暇で仕方ない同級生（全員ゲイ）が集まったら、「いつの間にか（化粧を）塗っていた」そうです（笑）。それでクリスマスに女装して、アルバイトでもなんでもなく、自発的にティッシュを駅前で配ったとか。バカですよ。

オネエとは逆に、男らしさを求めてすごくマッチョな方に進化していったゲイや、体はマッチョで言動はオネエのハイブリッド型とか。おもしろいですよ、もともとの自然の自分では生きられなくて、カスタマイズしていく中で、それが強烈な個性になっていく。そんな人たちが、これまでゲイの代表として世の中に発信してきたと思います。それで社会に存在感を示してきた。「ゲイはいますよー」って。上の世代に比べて、若い世代にオネエが少ないように感じるのも、体を張ってきた彼らのおかげで、昔に比べたら少しは素の自分で生きられるようになってきているのかなぁと思います。

今、特殊な存在から「こんなに身近なんだ」とわかってもらう段階に入っているのかもしれませんが。だから今度は僕のような取り立てて個性のないゲイの出番なんだろうが、勇気がない。

昔、僕のことをゲイだと知らない友人が「ストレス発散にホモ狩りにでも行くか」って言ってきたんです。彼は僕に友人として好意を持ってくれていたと思うし、少しやんちゃなところはあるけど、とても友人思いだったんです。だから、そんな発言をする奴だとは思ってなくて。そこで僕がカミングアウトしていたら、彼なりにちゃんと考えて、理解しようとしてくれた気がします。だけど悪い方向に進む可能性も拭えなかった。

僕は友達にはカミングアウトしたことないですけど、親にはしているんです。いろいろ重なってすごく弱っていたときに、親にまで嘘をついて、取り繕うのがしんどくなって。理解のある親だと思っていたし、当人もそう自負していたし、「オッサン！」くらいのことを言ってくれるのかと思いきや、「他のことはええけど、それだけは治して」と懇願されてしまいました。あれは結構厳しかったです。結局兄弟にも言ったら、「そんなこと別にええやんって人には言えるけど、自分がそうやったら辛いよなぁ」と理解してくれて、親にも何回も説明してくれました。おかげで理解とまではいきませんが、今では親との関係も普通になっています。

これまで何人かの友人や知人が自ら命を絶ちました。どういった知り合いなのか、故人が必死に隠してきたことを露見させてしまうのではないかと、葬儀を遠慮することもあります。

なぜそんな選択をしたのか、理由はわかりません。いつもあんなバカみたいなこと言っていたのに、なんで?と思う一方、わかるような気がします。世の中には楽しいことやおもしろいこと、素晴らしいこともたくさんあるし、好きな人や気の合う人もいます。それはわかったうえで、もし生まれてこないという選択ができるなら、僕はそちらを選びます。

これは「男らしく」と育てられた環境かもしれませんが、ゲイであることをいつも負い目と感じてしまう。それはとても苦しいです。仮に僕が出世しようが成功しようが、誰かの「でもホモやんか」というたった一言で、自分が粉々になってしまうと思います。女性と結婚して子供を作るというカードを持っている人が、使うか使わないかは別にして、他の何よりうらやましい。

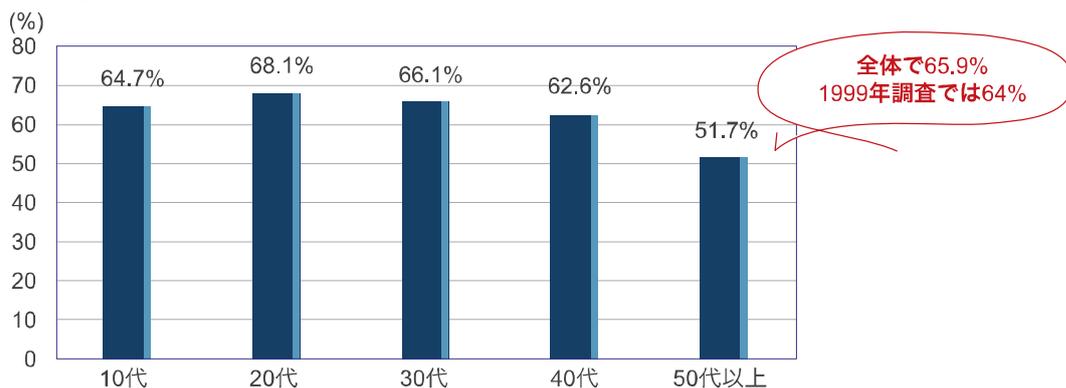
それに人間関係も、いつかゲイだとバレたときに、「気持ち悪い」と結びつけられないように、いつも考えなければならぬ。普段から人の体に触れることはしない、知人と風呂には行かないとか。行動だけでなく、バレたときに誤解されないよう、友人として密になることも避けるようにしています。そんなことを何十年もしていると、行き詰りそうになるときも、やっぱりあります。

【データ】 ゲイである自分で生きようと思えば思うほど、生きづらい世の中

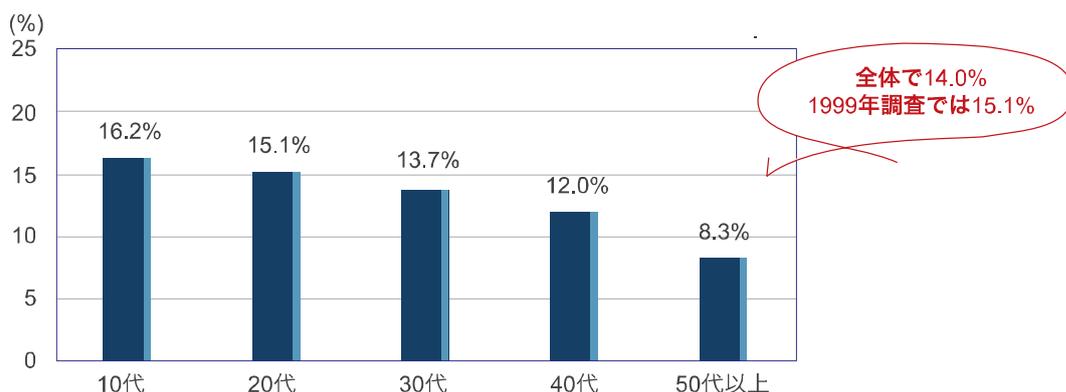
宝塚大学看護学部の日高庸晴教授らが 01 年ゲイとバイセクシュアル男性を対象に実施した調査で、これまで自殺を考えたことがあると 65.9%が回答、自殺未遂の経験があると 14.0%が回答しました。

また性的指向を 1 人にカミングアウトしていると、していない人より 1.5 倍自殺未遂に関連があり、6 人以上にカミングアウトしていると 3.2 倍になりました。

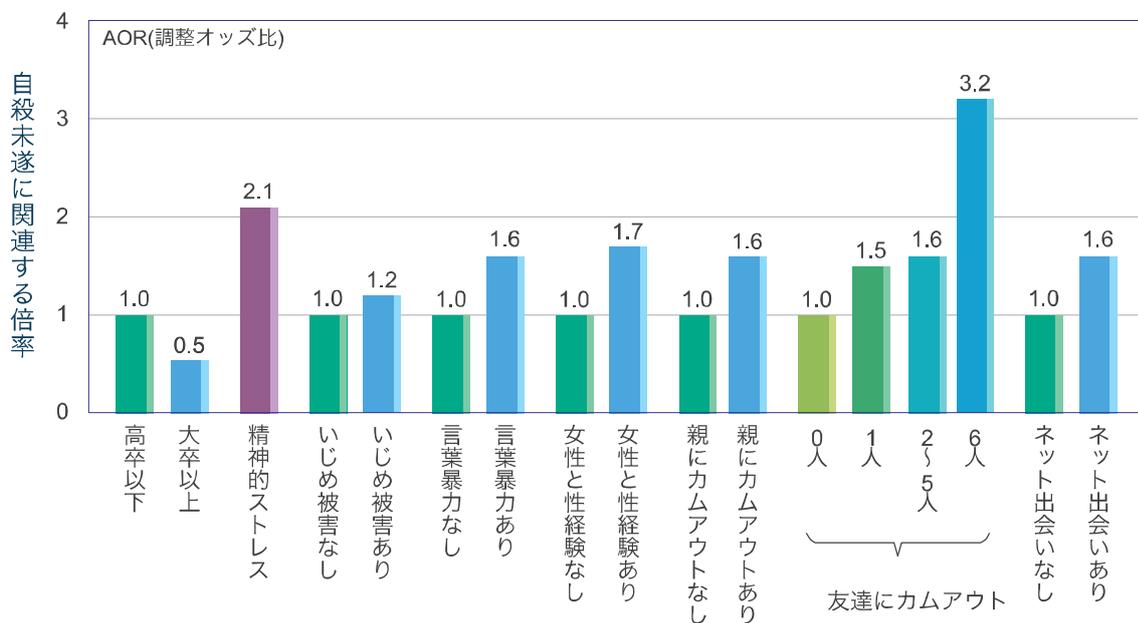
● 自殺を考えたこと



● 自殺未遂



● 自殺未遂に関連する要因 (1999年調査 有効回答数1,025人)



厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究推進事業

「ゲイ・バイセクシュアル男性の健康レポート2」

厚生労働省エイズ対策研究事業「男性同性間の HIV 感染対策とその評価に関する研究」成果報告より

ーパートナーとの関係について

男女のカップルや夫婦だと、「男が稼ぐ」「女が家事をする」という風潮ですよ。奥さんもフルタイムで働いているのに、家事育児が全部奥さんとか。そんなに稼ぎの悪くない旦那が小遣い昼飯代込みで2万なのに、専業主婦の奥さんは結構贅沢をしているとか。女が大変なカップルもいれば、男が大変なカップルもいる。

僕とパートナーは実家同士だから、家事は親にお任せですけど、もし一緒に暮らすようになったら、お互いが家事をするでしょうね。友人の同棲しているゲイカップルたちはお互い働いて、お互い家事をしています。誤解されている人がいるかもしれませんが、ゲイのカップルの中で、どちらかが妻の役割で、もう片方が夫の役割をすることはありません。僕らは子育てをしていないのでその大変さはわかりませんが、もし持つことができたならきっと分担してすると思います。

今気づきましたが、これは男同士だからかもしれませんね。常に対等。男女だと対等でないとちょっと違和感がありますが……。そうですね、立っている場所が違う感じがします。別々の円に立っているような。ゲイのカップルは同じ円の中に立っている。

ー最後に伝えたいことは？

今さらですが、僕はゲイの代表ではないので、今まで言ってきたことはゲイの総意ではありません。あくまで僕の意見・感想です。よくゲイは男の気持ちも女の気持ちもわかると言われますが、僕はどちらの気持ちもわかりません。特に女性の気持ちは。女として育った経験がないんですから。

確かに「(男には) (女には) (ゲイには) こういった傾向がある」ということはあると思います。でもそれを決めつけられ、当てはめられると、生きづらくなってしまいます。

最近気になるのは絆とか家族とか、それ自体は素晴らしいと思うのですが、そのことが同調圧力にならないかが心配です。形ありきで、絆・家族と言われても……。逆ですよ。絆や家族があって、それぞれ形がある。決まった形以外NOは生き辛い。

人づきあいを嫌って田舎から人が出ていったのも、核家族化が進んだのも、何かに問題があったから、その当時の人たちが望んでいたことです。その問題を解決しないかぎり、いくら絆とか家族といったところで、また同じことを繰り返すだけじゃないかな。自分らしく生きて、その違いをお互い認め合うことができれば、絆をつくり、家族をつくることはできるはず。

子どもの頃の刷り込みは、大人になって頭では間違っているとわかっているにもかかわらず、なかなか消すことができません。あまり親が自分の価値観を押しつけると、その価値観から外れた生き方しかできない自分はダメな人間だと、いつも後ろめたさを感じていくことになります。親の価値観に合わなくても、人に迷惑をかけたりするようなものでないなら、「それでもいい」と、子どもが本来持っている個性を見守ってあげて欲しいと思います。

最後にひとつ。以前、大須をゲイの友人と歩いていたとき、バス停で紙袋からフィギュアを取り出しているオタクファッションの若者がいたんですね。僕が「家まで待ちきれやんのやなあ」と揶揄して笑ったら、友人が「でも俺ら、男が好きなんやで」と言ったんです。はっとしました。僕はゲイということを笑われるのがイヤなのに、立場が変われば誰かのことを笑っていることに気づきました。

僕はマイノリティである一方で、マジョリティでもある。もしかしたら誰もがそうかもしれません。そしてみんながそのことを意識していれば、もうちょっと生きやすい世の中になるのかなあと思います。

情報誌「Frente」vol.61 では、他にもエッセイ「メキシコの旅より」（新連載！）や、小島慶子さんによる講演会のレポートなど盛り沢山！

下記 URL よりダウンロードもできますので、皆様ぜひご覧ください。

http://www.center-mie.or.jp/frente/information_magazine